

## エステル記4-7章 「神の逆転劇」

### 1A エステルの決断 4

1B 嘆きの理解 1-9

2B 特別な時 10-16

### 2A 冷静な計画 5

1B 王の好意 1-8

2B ハマンの自惚れ 9-14

### 3A 悪を善に変える神 6

1B モルデカイへの報い 1-9

2B 卑しくされた自尊心 10-14

### 4A 自滅する悪者 7

## 本文

エステル記4章です。ハマンの陰謀により、全ペルシヤに住むユダヤ人を、第十二の月の十三日という一日のうちに根絶やしにせよという法令が文書で各地に伝えられました。首都シュシャンでも町が混乱に陥りました。

### 1A エステルの決断 4

#### 1B 嘆きの理解 1-9

4:1 モルデカイは、なされたすべてのことを知った。すると、モルデカイは着物を引き裂き、荒布をまとい、灰をかぶり、大声でひどくわめき叫びながら町の真中に出て行き、4:2 王の門の前まで来た。だれも荒布をまとったままでは、王の門にはいることができなかったからである。4:3 王の命令とその法令が届いたどの州においても、ユダヤ人のうちに大きな悲しみと、断食と、泣き声と、嘆きとが起こり、多くの者は荒布を着て灰の上ですわった。

着物を引き裂くことや、荒布をまとって灰をかぶることは、ユダヤ人が嘆きや悲しみを言い表す時、罪の悔い改めをする時にいつもすることです。ペルシヤの王の前では、そうした悲しみや嘆きを表してはいけないという法令あるいは決まりがあったので、モルデカイは門で働いている者でしたが入ることができませんでした。覚えていますか、ネヘミヤが嘆きをもって祈っていた時に、彼は王に酒を持ってくる献酌官でしたが、その顔に悲しみが表れているのが、王に知られてしまいひどく恐れた、とあります。王の前ではそのような表情を出せば、厳しく罰せられてもおかしくなかったのです。

4:4 そのとき、エステルの侍女たちと、その宦官たちがはいつて来て、彼女にこのことを告げたので、王妃はひどく悲しみ、モルデカイに着物を送って、それを着させ、荒布を脱がせようとしたが、

彼はそれを受け取らなかった。4:5 そこでエステルは、王の宦官のひとりで、王が彼女に仕えさせるために任命していたハタクを呼び寄せ、モルデカイのところへ行って、これはどういうわけか、また何のためかと聞いて来るように命じた。4:6 それで、ハタクは王の門の前の町の広場にいるモルデカイのところに出て行った。

モルデカイが門の前で、大声で嘆いていますから、エステルの侍女や宦官たちの耳にも入ってきました。彼らはかつてから、モルデカイとエステルについてつながりがあることは知っていました。モルデカイが王の殺害を計画していた宦官のことを、彼らを通してエステルに伝えていました。そしてエステルは狼狽しています。「ひどく悲しみ」とありますが、「ひどく狼狽している」と訳すこともできます。

4:7 モルデカイは自分の身に起こったことを全部、彼に告げ、ハマンがユダヤ人を滅ぼすために、王の金庫に納めると約束した正確な金額をも告げた。4:8 モルデカイはまた、ユダヤ人を滅ぼすためにシュシャンで発布された法令の文書の写しをハタクに渡し、それをエステルに見せて、事情を知らせてくれと言い、また、彼女が王のところに行って、自分の民族のために王にあわれみを求めるように彼女に言いつけてくれと頼んだ。4:9 ハタクは帰って来て、モルデカイの伝言をエステルに伝えた。

ハタクという名前が何度も出てきます。王の宦官であります、エステルに仕えるよう任命を受けていた人です。モルデカイとエステルの間の決して他言は許されない事柄を、伝書鳩のように言ったり来たりしながら伝えていきます。この功績を、ユダヤ人の生き残りに貢献した者として、おそらく著者は残したかったのではないかと思います。かつて、パロからヘブル人から生まれる男の子はみな殺せと命じられた時に、シフラとプアというように、二人の功績を残すかのように名前が書き記されています(1:15)。

## 2B 特別な時 10-16

4:10 するとエステルはハタクに命じて、モルデカイにこう伝えさせた。4:11 「王の家臣も、王の諸州の民族もみな、男でも女でも、だれでも、召されないで内庭にはいり、王のところに行く者は死刑に処せられるという一つの法令があることを知っております。しかし、王がその者に金の笏を差し伸ばせば、その者は生きます。でも、私はこの三十日間、まだ、王のところへ行くようにと召されていません。」

これは、法令です。王をあらゆる敵から守るために、内庭に入れば条件なしで殺されます。思い出すのは、イザヤが目撃した天の御座の幻ですがイザヤは、「ああ。私は、もうだめだ。(イザヤ6:3)」と嘆きました。死んでしまうということです。王の尊厳と威光の前に招かれないでいるならば死んでしまうというのは、神の前でも、人間の王の前においても同じです。しかし、王が好意を示して金の笏を差し出すならば、その人は憐れみを受けます。けれども、エステルは三十日間、召さ

れていません。すなわち、エステルに会いたいという意思表示がこの頃ないので、彼女に好意を示す可能性が低いのです。

4:12 彼がエステルのことばをモルデカイに伝えたと、4:13 モルデカイはエステルに返事を送って言った。「あなたはすべてのユダヤ人から離れて王宮にいるから助かるだろうと考えてはならない。4:14 もし、あなたがこのような時に沈黙を守るなら、別の所から、助けと救いがユダヤ人のために起ころう。しかしあなたも、あなたの父の家も滅びよう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない。」

エステルは実際的な脅威を話しましたが、モルデカイは霊的な現実を話しました。彼女が死に面するというのは実際上、可能性の高いことでしたが、ユダヤ人が全滅するというのは神ご自身の計画が無きものにされるという、実際的な脅威よりもはるかに恐ろしいことであります。ここは、エステルの霊的な転換期です。モルデカイに従い、ユダヤ人の娘であるという意識も内心では持っていました。けれども、それを神の救いのご計画の中に自身を投入しなければいけない決断です。

すべての神の働きは、日常から離れるところから始まります。キリスト者として、社会の中で神への良心をもって生きていくのですが、神はご自分の計画の中で非日常の中に招き入れます。初めに信じる時に、イエス・キリストへの信仰の中に入ることで自分が非日常でありました。これまでの自分の持っていたものを手放さなければなりません。それでも、キリストが罪人を救うために来られたという救いの言葉を聞いて、この世からの分離をしました。そして、主はご自分の御国を、私たちを通して拡げたいと願われています。その熱心が、私たちが日常の生活を歩むことよりも自分の心にも伝わるならば、私たちはエステルと同じ決断をしなければいけません。

4:15 エステルはモルデカイに返事を送って言った。4:16 「行って、シュシャンにいるユダヤ人をみな集め、私のために断食をしてください。三日三晩、食べたり飲んだりしないように。私も、私の侍女たちも、同じように断食をしましょう。たとい法令にそむいても私は王のところへまいります。私は、死ななければならないのでしたら、死にます。」

エステルは時間を取りました。断食としか書いていませんが、もちろん祈りの中で断食しています。エステルは、ユダヤ人の同胞の断食をもって、また自分自身の断食をもって、自分自身を神に委ねます。しかし、神に自分自身を任せた者には、神はご自分の計画を明らかにしてくださいませ。しばしば、「神のご計画が分からない」という言葉を聞きます。自分を主に任せるのです。そうすれば、見えてくる神の世界があります。

## **2A 冷静な計画 5**

### **1B 王の好意 1-8**

5:1 さて、三日目にエステルは王妃の衣装を着て、王室の正面にある王宮の内庭に立った。王は

王室の入口の正面にある王宮の玉座にすわっていた。5:2 王が、庭に立っている王妃エステルを見たとき、彼女は王の好意を受けたので、王は手に持っていた金の笏をエステルに差し伸ばした。そこで、エステルは近寄って、その笏の先にさわった。

主が働かれた瞬間です。ネヘミヤがペルシヤ王アルタシャスタの前で、自分の先祖の墓があるところに戻りたいと願った時に、そのまま承諾してくれたあの好意と同じです。ネヘミヤは、「私の神の恵みの御手が私の上にあった(ネヘミヤ 2:8)」と言いましたが、神の恵みの御手であります。

5:3 王は彼女に言った。「どうしたのだ。王妃エステル。何がほしいのか。王国の半分でも、あなたにやれるのだが。」5:4 エステルは答えた。「もしも、王さまがよろしければ、きょう、私が王さまのために設ける宴会にハマンとごいっしょにお越してください。」5:5 すると、王は、「ハマンをせきたてて、エステルの言ったようにしよう。」と言った。王とハマンはエステルが設けた宴会に出た。

「王国の半分でも、あなたにやれるのだが」と言った言葉は、文字通りではありません。「何でもしてあげるよ」という王の気前良さを示す表現であります。そして、エステルはすぐに、自分の願うことを話しません。彼女の用意する宴会に、ハマンと王だけを招きたいという願いです。

ところで、前回の学びにおいてエステル記の説明として、ヤハウエという神の名前が本文の中に盛り込まれているという話をしました。ここにもあります。「きょう、王様のために、ハマンといっしょにお越してください。」のそれぞれの単語の頭だけ取ると、YHWH となります。ですから、エステル記に神の名がないというのは、厳密に言うとは違うのです。直接的に神の名が語られなくとも、その背後に確実に神が働いておられることを教えているのがこの書物です。

5:6 その酒宴の席上、王はエステルに尋ねた。「あなたは何を願っているのか。それを授けてやろう。何を望んでいるのか。王国の半分でも、それをかなえてやろう。」5:7 エステルは答えて言った。「私が願い、望んでいることは、5:8 もしも王さまのお許しが得られ、王さまがよろしくて、私の願いをゆるし、私の望みをかなえていただけますなら、私が設ける宴会に、ハマンとごいっしょに、もう一度お越してください。そうすれば、あず、私は王さまのおっしゃったとおりにいたします。」

エステルは、極めて慎重に動いています。その願っていることを話すのに、もう一度宴会を設けるので、ハマンといっしょに来てくださいというものです。なぜ、その場で言わなかったのか？事が重大なだけに、王の心を確かめたいし、またハマンの心に油断を与えたいし、そして自分の爆弾発言をここぞという時に落とせるようにしたいということもあるでしょう。

ヨセフがそうでした。兄たちが、自分の前でひれ伏している時に自分の見た夢のとおりであることを知りました。けれども、ヤコブの家がその後、どのように暮らしてきたのかを知りたかったでしょう。そして何よりも、兄たちが弟ベニヤミンに対して自分に対してしたように悪いことをしているのか、

それとも兄の気持ちは変わったのか、知りたかったのです。それで自分の本性を明かす前に、じっくりと時間を取りました。エステルも同じような気持ちだったに違いありません。

けれども、主はエステルの思惑以上に、事を運んでおられます。あす宴会を設けるといったその次の日までに、主は全くの逆転劇を与えてくださいます。彼女が慎重に動いていることはすばらしいことですが、神はそれを上回る逆転をその主権の中で働かせています。「事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。(ローマ 9:16)」

## 2B ハマンの自惚れ 9-14

5:9 ハマンはその日、喜び、上きげんで出て行った。ところが、ハマンは、王の門のところにいるモルデカイが立ち上がろうともせず、自分を少しも恐れていないのを見て、モルデカイに対する憤りに満たされた。

モルデカイは、主が事を運んでおられることを確信していたのでしよう。以前と変わらずに、ハマンに礼をすることを拒みました。そして感情というのは、本当に頼りにならないものです。上機嫌になっても、次の瞬間に憤りに満たされます。

5:10 しかし、ハマンはがまんして家に帰り、人をやって、友人たちと妻ゼレシュを連れて来させた。  
5:11 ハマンは自分の輝かしい富について、また、子どもが大ぜいいることや、王が自分を重んじ、王の首長や家臣たちの上に自分を昇進させてくれたことなどを全部彼らに話した。5:12 そして、ハマンは言った。「しかも、王妃エステルは、王妃が設けた宴会に、私のほかはだれも王といっしょに来させなかった。あすもまた、私は王といっしょに王妃に招かれている。5:13 しかし、私が、王の門のところにすわっているあのユダヤ人モルデカイを見なければならない間は、これらのことはいっさい私のためにならない。」

これだけ自己陶酔してしまうとは、驚きを越えて呆れてしまいます。自分の富、自分が王に重んじられている、全部「自分」です。次の箴言の言葉を思い出します。「高ぶりは破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ。(16:18)」このような者には破滅が待っています。彼の取り去られる時限が明日と定められています。

5:14 すると、彼の妻ゼレシュとすべての友人たちは、彼に言った。「高さ五十キュビトの柱を立てさせ、あしたの朝、王に話して、モルデカイをそれにつけ、それから、王といっしょに喜んでその宴会においでなさい。」この進言はハマンの気に入ったので、彼はその柱を立てさせた。

五十キュビトは約 24 メートルです。そこに、おそらく串刺しのようにつく柱でありました。

心は高ぶりから悪意へと移っています。悪意は実際の殺意へと向かわせる毒であります。私た

ちは心に悪意を抱いたら、すぐに捨てなければいけません。それは教会全体を汚すし、内におられる聖霊ご自身を悲しませます。「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。(エペソ 4:30-31)」

そして、王の側近に王の気に入る助言をする者たちがいたように、ハマンの回りにはハマンの願うことを助言する妻と友がいました。しばしばお話ししますが、私たちは自分の回りに誰を置いているのかを考えないといけません。よく話す人、心を開かす人、助言を求めるような人、そのような人々が主を求め、神の知恵を求める人でしょうか？それとも、悪意や陰口で結びついていますか？「知恵のある者とともに歩む者は知恵を得る。愚かな者の友となる者は害を受ける。(箴言 13:20)」

### **3A 悪を善に変える神 6**

#### **1B モルデカイへの報い 1-9**

6:1 その夜、王は眠れなかったので、記録の書、年代記を持って来るように命じ、王の前でそれを読ませた。6:2 その中に、入口を守っていた王のふたりの宦官ビグタナとテレシュが、アハシュエロス王を殺そうとしていることをモルデカイが報告した、と書かれてあるのが見つかった。6:3 そこで王は尋ねた。「このために、栄誉とか昇進とか、何かモルデカイにしたか。」王に仕える若い者たちは答えた。「彼には何もしていません。」

驚きの出来事です。彼が眠れなくて年代記を読んでいます、ペルシヤ王は年代記を読ませるという習慣を持っていました。自分の不眠のために読ませるのは納得が行きます。驚きなのは、なぜこのタイミングで眠れなくなり、そしてモルデカイの業績が書かれている記録を見つけたのか？ということです。ここに神の摂理が鮮やかに描かれています。

思い出すと、パロが夢を見た時にその解き明かしが欲しい時に、あの献酌官は牢にいたヨセフを思い出しました。そしてヨセフが彼のために夢の解き明かしをしてくれたことに報いたのです。それは、二年後のことです。もし、献酌官がすぐにパロに話したのであれば、ヨセフはすぐに釈放されたかもしれませんが、まさかエジプトの第二の権力者にはならなかったでしょう。ですから、私たちは忍耐が必要です。いつ自分の良い行いが報われるのかは分からないのです。けれども気落ちしないで、善を行ないます。神はちょうど良い時に引き上げてくださいます。

6:4 王は言った。「庭にいるのはだれか。」ちょうど、ハマンが、モルデカイのために準備した柱に彼をかけることを王に上奏しようと、王宮の外庭にはいつて来たところであった。6:5 王に仕える若い者たちは彼に言った。「今、庭に立っているのはハマンです。」王は言った。「ここに通せ。」6:6 ハマンがはいつて来たので、王は彼に言った。「王が栄誉を与えたいと思う者には、どうしたらよからう。」そのとき、ハマンは心のうちで思った。「王が栄誉を与えたいと思われる者は、私以外にだ

れがあろう。」6:7 そこでハマンは王に言った。「王が栄誉を与えたいと思われる人のためには、6:8 王が着ておられた王服を持って来させ、また、王の乗られた馬を、その頭に王冠をつけて引いて来させてください。6:9 その王服と馬を、貴族である王の首長のひとりの手に渡し、王が栄誉を与えたいと思われる人に王服を着させ、その人を馬に乗せて、町の広場に導かせ、その前で『王が栄誉を与えたいと思われる人はこのとおりである。』と、ふれさせてください。」

そして次の 10 節で、王はその栄誉をモルデカイにさせなさい、と命じます。完全な逆転劇です。ハマンがモルデカイを殺し、自分が高められることを求めたのに、神はそれを、モルデカイを高め、ハマンに恥をかかせるように変えられました。「だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。(ルカ 18:14)」とあるとおりです。そしてこれは、兄たちがヨセフに悪を計ったけれども、神がそれをヤコブの家を救うために変えられたのと似ています。そして何よりも、ユダヤ人指導者がイエスを十字架につけるように仕向けたことが、暗闇の力がイスカリオテのユダの心に入り、キリストを死に引き渡すという働きが、復活という出来事によって、全人類に対する永遠の救いの御業へと変わりました。悪魔の力が神の栄光へとそのまま使われたのです。

神は、このように私たちに、私たちの思いをはるかに越えたところにある「ファクターX」を持っておられることを教えておられます。神の福音が大逆転劇です。「罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。(ローマ 5:20)」とあります。罪が増し加わるのであれば、それだけ神の理想から遠く離れているのではないか、そこからの回復や復興は時間がかかる、というのが私たちの見方です。しかし、奥の手があります。トランプや、ボードゲームで、一生懸命努力して積み上げた得点が、たった一つのカードですべてごっそり相手に持っていかれる、ということがありますね。そのたった一枚のカードを神は私たちの人生に、そしてこの世界と宇宙に対して持っておられます。

悪魔がもたらし、人の罪によって積み上げられた負の遺産のすべてを、神はそのままごっそり、義といのちで支配する神の子たちの国へと変えてくださるのです。そのカードとは、罪人でないのに罪人とみなされるキリストであります。そのことによって、キリストの義がそのまま私たちの義とみなされるという芸当を神は行われました。誰もが思いもつかなかったことを、神は予め用意されてそれを実行に移されました。

## 2B 卑しくされた自尊心 10-14

6:10 すると、王はハマンに言った。「あなたが言ったとおりに、すぐ王服と馬を取って来て、王の門のところすわっているユダヤ人モルデカイにそうしなさい。あなたの言ったことを一つもたがえてはならない。」

この時点で、アハシュエロスはすでにモルデカイが「ユダヤ人」であることを知っていたようです。その業績を知って、すぐに調べさせ彼がユダヤ人であって、そして門の前にいるモルデカイであることを知ったのでしょう。その時にハマンが入ってきました。けれども、もちろんハマンがこのことに

深く関わっていることは知りませんでした。ですから、王の一言一言が、神によって動かされていることを知ります。「王の心は主の手の中であって、水の流れのようだ。みこころのままに向きを変えられる。(箴言 21:1)」王のみならず、主は私たちのあり方、全ての言葉にご自分の計画を持っておられることを教えています。「人は心に計画を持つ。主はその舌に答えを下さる。(箴言 16:1)」

6:11 それで、ハマンは王服と馬を取って来て、モルデカイに着せ、彼を馬に乗せて町の広場に導き、その前で「王が栄誉を与えたいと思われる人はこのとおりである。」と叫んだ。6:12 それからモルデカイは王の門に戻ったが、ハマンは嘆いて、頭をおおい、急いで家に帰った。6:13 そして、ハマンは自分の身に起こった一部始終を妻ゼレシュとすべての友人たちに話した。すると、彼の知恵のある者たちと、妻ゼレシュは彼に言った。「あなたはモルデカイに負けかけておいでですが、このモルデカイが、ユダヤ民族のひとりであるなら、あなたはもう彼に勝つことはできません。きっと、あなたは彼に負けるでしょう。」

この「ユダヤ人」という言葉が王のみならず、妻ゼレシュの口からも出てきます。明らかに、ハマンに対して神がユダヤ人を呪ったことに対する呪いを与えるということの前兆です。「あなたをのろう者をわたしはのろう。(創世 12:3)」ペルシヤ人のゼレシュがどうしてそんな真理を知っているのか、と思われるかもしれませんが、いいえ、かつてイスラエル人のスパイにカナン人ラハブが、エリコの住民はイスラエル人に恐れおののいていることを伝えました。イスラエル人に触れるものなら、大きな災いが来ることを知っていたのです。

そして、これは神の民を前にして、悪者を裁かれるということの前兆であります。詩篇 58 篇に、このような言葉があります。「正しい者は、復讐を見て喜び、その足を、悪者の血で洗おう。こうして人々は言おう。『まことに、正しい者には報いがある。まことに、さばく神が、地におられる。』(10-11 節)」これは、誰か特定の人物への復讐のことではありません。むしろ、ねたんで争い、戦うのであれば敗北であります。悪魔が勝ち誇っています。そうではなく、聖霊の実を結ばせることが敵に対する勝ち誇りです。「神の国は・・・、義と平和と聖霊のよる喜びだからです。(ローマ 14:17)」主に服従することによってもたらされる、神の勝利とその御国の拡大のことを話しています。その時に悪魔はハマンのように面目を完全に失い、顔を覆ってしまうのです。

6:14 彼らがまだハマンと話しているうちに、王の宦官たちがやって来て、ハマンを急がせ、エステルの設けた宴会に連れて行った。

神のご計画、その裁きが速やかに行われることを伺い知ります。

#### **4A 自滅する悪者 7**

7:1 王とハマンはやって来て、王妃エステルと酒をくみかわした。7:2 この酒宴の二日目にもまた、王はエステルに尋ねた。「あなたは何を願っているのか。王妃エステル。それを授けてやろう。何



を望んでいるのか。王国の半分でも、それをかなえてやろう。」

ここでエステルは、後にネヘミヤがアルタシャスタ王の前で自分の願いを話した時と同じように、恐れを抱きつつも、神に祈り、そして勇気を出して話し出したと思います。

7:3 王妃エステルは答えて言った。「もしも王さまのお許しが得られ、王さまがよろしければ、私の願いを聞き入れて、私にいのちを与え、私の望みを聞き入れて、私の民族にもいのちを与えてください。7:4 私も私の民族も、売られて、根絶やしにされ、殺害され、滅ぼされることになっています。私たちが男女の奴隷として売られるだけなら、私は黙っていたでしょうに。事実、その迫害者は王の損失を償うことができないのです。」

エステルが、渾身の思いで事の全容を話していることが分かります。「男女の奴隷として売られるだけなら、黙っていた」というのは、奴隷状態という悲惨なことであっても、王に直訴することはできないほど、王は力があり、煩わしてはいけない存在だということです。そして、かつてアルタシャスタにエルサレム帰還を願い出たネヘミヤと同じように、ユダヤ人という名称を避けて話しています。王にとっては、エステルの命が奪い取られようとしているということが最も重大です。そして、彼女の同胞の民が全滅するというのも重大です。だからエステルは、この点を強調しました。

7:5 アハシュエロス王は王妃エステルに尋ねて言った。「そんなことをあえてしようとたくらんでいる者は、いったいだれか。どこにいるのか。」7:6 エステルは答えた。「その迫害する者、その敵は、この悪いハマンです。」ハマンは王と王妃の前で震え上がった。

主の導きと守りの中で、エステルはハマンが逃げられない形で追い詰め、悪を暴くことができました。

7:7 王は憤って酒宴の席を立て、宮殿の園に出て行った。ハマンは王妃エステルにいのち請いをしようとして、居残った。王が彼にわざわいを下す決心をしたのがわかったからである。

王は憤りました。ワシュティが自分に従わなかったことで憤った王ですが、ここでは次元の異なるはるかに激しい憤りだったことでしょう。自分がハマンに騙されていたという怒りが大きかったと思います。ハマンの企みに自分が利用されていたことに対して、自分の愚かさに対しても忸怩たる思いだったのではないかと思います。彼が酒宴の席を立ったのは、感情的な爆発を越えて、さらに激しい怒りがあったため、この裁きをいかに下すか一息置いて考えていたでしょう。

7:8 王が宮殿の園から酒宴の広間に戻って来ると、エステルのいた長いすの上にハマンがひれ伏していたので、王は言った。「私の前で、この家の中で、王妃に乱暴しようとするのか。」このことばが王の口から出るやいなや、ハマンの顔はおおわれた。

王妃に手を出すことは、即死刑です。顔を覆われたのは刑の執行を準備していることに他なりません。

7:9 そのとき、王の前にいた宦官のひとりハルボナが言った。「ちょうど、王に良い知らせを告げたモルデカイのために、ハマンが用意した高さ五十キュビトの柱がハマンの家に立っています。」すると王は命じた。「彼をそれにかけてよ。」7:10 こうしてハマンは、モルデカイのために準備しておいた柱にかけられた。それで王の憤りはおさまった。

宦官ハルボナは、すでにモルデカイをかけるための柱についての情報を得ていたようです。王の思いを実現するために、これにかければよいと提案します。そして、「王の憤りはおさまった」とあります。それはハマンを柱にかけただけでなく、ハマンがモルデカイを殺そうと用意していた柱に、彼をそのままかけることができたからです。ハマンが、自分の行ないに対してそのまま報いを与えることができたからです。人間の王であっても、その王の裁きには神の公正と義が反映されています(参照:箴言 16:12)。

黙示録 16 章には、神が地上の獣の国に対して、ご自分の激しい怒りの極みを注がれる光景が出てきます。そこで、地上の水源となっているものはみな血に変わる災いがあります。そして、水をつかさどる御使いがこう言いました。「常にいまし、昔います聖なる方。あなたは正しい方です。なぜならあなたは、このようなさばきをなされたからです。彼らは聖徒たちや預言者たちの血を流しましたが、あなたは、その血を彼らに飲ませました。彼らは、そうされるにふさわしい者たちです。(5-6 節)」聖徒や預言者たちの血を流したので、同じように彼らに血を飲ませました。これらの報いを与えられることによって、神の激しい怒りは満たされることになります。

こうしてハマンは、ユダヤ人を呪ったので自分が同じ呪いを被りました。そして、「人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。(ガラテヤ 6:7)」とあるように、モルデカイへの殺害の意図は、自分自身がその死刑台で殺されるということによって実現しました。また、悪者は自分のしかけた罠に落ちることになります。「主はご自身を知らせ、さばきを行なわれた。悪者はおのれの手で作ったわなにかかった。(詩篇 9:16)」

私たちはここで、逆転劇によるキリストの裁きを考えてみたいと思います。イエス様は言われました。イエス様が十字架につけられる日が近づいた時に、こう言われました。「今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです。わたしが地上から上げられるなら、わたしはすべての人を自分のところに引き寄せます。」(ヨハネ 12:31-32)」先ほども話しましたように、イエス様が引き渡されるのは、暗闇の力がやって来たからです(ルカ 22:53)。サタンがイスカリオのユダの心に入り、そして彼を引き渡すことをユダヤ人指導者に約束しました。キリストが死なれるのは、明らかに悪魔の力が働いていたからです。

しかし、イエス様はそれを「この世を支配する者は追い出される」と言われたのです。悪魔が仕掛けた滅びの業を、イエス様はかえって悪魔を追い出す出来事になると言われました。それはどうということなのか？イエス様は続けて、ご自分が引き上げられれば、人々をご自分に引き寄せることになると言われます。十字架によって、罪によって神から引き離されていた人々をご自分のところに引き寄せるのだということです。悪魔はイエスが十字架につけられるように仕向けました。悪魔のすることは、殺して、滅ぼすことです。しかし、その死を神は、全人類の罪の罰を受けたものとしてくださいました。それゆえに、悪魔が意図していた、人を神から引き離すという仕業が完全に覆されたのです。もう悪魔は、キリストにある者に手を出すことはできなくなったのです。

ヘブル書 2 章 14-15 節には、こうあります。「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」そして、コロサイ書 2 章 14-15 節には、悪魔の勢力がキリストの十字架によってさらし者となったことが告げられています。「いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。」

金曜の夜、アメリカで用いられている著名な、フィル・ウィッカムというワーシップ・シンガーがいます。カルバリーチャペルで多く用いられている器です。けれども、彼が自分のサイトで自分の声が使えなくなったことを書きました。突然のことで、コンサートの途中で自分の声がかおかしくなったことに気づいたそうです。それでその後のコンサートを中止して、専門家に見てもらいました。幸い手術をしなくてもよいですが、完全に声を出さない状態を続ければとのこと。その期間が数か月にも及ぶかもしれないし、とにかく沈黙です。

これまでこの声を頼りに、主に用いられていました。けれども、彼は平安に満たされています。「私はたくさん聞くようになっていきます。これまで以上に聞いているので、今まで十分に聞いていなかったのではなかったのかと感じるほどです。主が深く、私に語りかけておられます。本当に平安です。愛されています。恐れの際は、十字架をおもう思いで消滅します。不安の時も、神の恵みの囁きの中で消え去ります。このことを感謝しています。(下線は私によるもの)」<sup>1</sup>

これが、十字架の御業です。悪魔による恐れや不安は、十字架と神の恵みの前で消え去るので、悪魔の仕業は完全に潰えます。悪魔は裁かれたのです。だから、悪魔は一兄弟の喉をつぶしたことに成功したかもしれないけれども、彼の魂をつぶすことはできず、むしろ自分自身が十字架の前で潰されたのです。皆さんの中にも、悪魔の攻撃を受けている人がいるかもしれません。十

---

<sup>1</sup> <http://www.philwickham.com/i-think-im-learning-something-about-identity-which-weaves-into-calling-which-then-becomes-our-legacy/>

十字架に来てください。十字架にある神の愛を知ってください。そこにある神の平安を知ってください。  
敵に対して高らかに勝ち誇ることができます。